

授業参観

11月25日（月）は須崎小学校6年生の算数の授業を参観してきました。授業の場所はラーニング・コモンズで、学びを子どもたちに委ねた複線型の授業でした。

ラーニング・コモンズ

学習者が自由に学習できるように、通信環境や机・椅子・ホワイトボードなどの設備が整った開放的な学習空間。須崎小学校では問題を設置するホワイトボードと自由に使える椅子と机、問題や解答を入れておく棚などが設置されていました。

この日の授業の目標は「比例の関係を使って問題を解決できる」でした。これまでの授業では、比例の性質やグラフ、日常事象への適用などを学習しているようでした。

今回の授業では、5つに色分けされた問題（カラーミッション）と、2問の発展問題（ネクストステージ）に取り組んでいました。子どもたちは自分が解く問題を選んで学びたい場所へ行き、自分たちで学習を進めていました。

※須崎小学校では「ミッション」という言葉が共通言語として浸透しているようでした。「問題」や「課題」よりもワクワクする響きですね。



この空間を使う条件はただ1つ。「本気で学ぶ」だそうです。個人で学習する児童、ペアで学習する児童、グループで学習する児童と、学習形態は様々でしたが、みんな本気で学びに向かっていたと思います。学ぶ場所はバラバラでしたが、今はICTがあります。彼らが学ぶ様子は、ロイロノートの共有ノートによって担任も確認することができ、その様子は常に教室前方のモニターに投影していました。



また、お互いの問題解決の様子は児童同士も確認することができるので、自力で解決するのが難しい問題は、仲間がどのようにして解いているかを確認（他者参照）して挑戦することもできる状態にっていました。問題が解けたら、子どもたちは自分で解答を確認して丸付けをします。解答もこの空間の一面に棚を設け、それぞれのミッションごとに分けて用意されており、解き終わる度に自分で取りに行くというシステムになっていました。



グループの中には、ホワイトボードを活用して考え方を確認しながら問題に取り組む子どもたちもいました。疑問があれば質問をしあい、皆が納得できるまで説明をしていました。教師から「問題の考え方を確認してね」「分からないことは質問してね」などと言わずともこうした営みが自分たちでできるのは、日々、担任の山崎先生がそういったことを大切にした指導をされているからだろうと思います。

Q.

では、子どもたちが自分で学習を進めている間担任の先生はいったい何をしているのでしょうか

今回の場合、山崎先生は児童の進捗状況をタブレットで確認しながら、適宜個別指導に当たっていました。単線型の授業とは違い、複線型の授業では児童同士の対話が生まれやすいというメリットがあります。それによって、気になっても聞くこともできずに消えていく小さな疑問は、子どもたち同士で確認しながら学習を進められます。そのため、教師は本当に困っている子どもたちにアプローチできます。

山崎先生は、困っている児童のサポートだけではなく頑張る姿を見つけてはこまめに肯定的な声掛け（勇気づけ）を行っていました。この声掛けは子どもたちの主体的な学びを強化することになっていると思います。



授業の最後はモニターの前に集まって、全体の進捗状況や今後の方針を確認していました。この時モニターには子どもたちが書いた振り返りが写されていたのですが、これも先生から「振り返りを書きましょう」と指示があったわけではなく、気付いたら書いていました。1時間の流れが子どもたちにも浸透しているのだと思います。

子どもたちが自ら学習の順番や形態を選択して、意欲的に学ぶことができていた授業でしたが、これは日々の学級経営（学習規律の徹底・心理的安全性の保障）があってこそだと思います。また、子どもたちに学びを委ねるには、その単元で子どもたちがどのような能力を身に付けなければならないかを授業者が十分に理解している必要があります。形だけ真似しても授業は成立しません。改めて教材研究と学級経営の大切さを実感した授業でした。